ろ毎晩水がびっしり張っちまう。川口川も東電の前の川も、一寸、二寸もの氷が張ったんです。だから船が出る時は、夜の十二時頃ですから、びっしり張った氷を、舳先に立った男が、長い竹竿を持って、ぽたーん、ぽたーんって叩き割りながら船を進めたんです。とに角、船が氷の無い所まで出るのが大変だったんですね。太鼓橋と閘門橋の丁度真中ぐらいまでは氷が真白に張りましたから。これが毎日ですよ。どういうわけか、此の頃は、氷も張らないからおかしいって思うんですよ。こんな風に寒い思いをしていたから、男たちは早死にでしたよ。七十、八十なんて男はいませんでしたよ。四十、五十で皆死んじゃうんです。だから東崎は後家さんばかり目立ちました。男たちが漁に出ている間、女たちは炉の回りに集まって、ズブーリ、ズブーリとお茶を飲みながら世間話なんかをしていたんですから。長生きも出来たんですね。昼間は女も百姓をやって大変でしたがね。よく水害でまともに稲はとれませんでしたから。ああ、今年も水だ。また今年も水だってね。まともにとれるのは四年か五年にいっぺんでした。

そうこどもの頃覚えているのは、家の庭にたなごがいっぱいに干してあったことです。たなごはどうしようもない程とれてね。問屋でも受けつけないんです。だから夫々の家で煮干しにしておくんですけど、こどもはそれをおやつの代りに、しょりしょり食べたりしました。家の裏の出し端で、食べ残りのごはんをまいてやると、鮒がそれをつつきに来るのがよく見えたんですよ。それがこの頃はたなごどころか、鮒や鯉もいないんですから、情け無い時代になったもんです。

最近はあんまり汚ないんで、霞ケ浦へ行く気もしませんが、何とかならないもんでしょうか。みんなあの水を飲んでいるんだしねえ。

真夏の昼の夢

田淵　俊雄

霞は女子大の二年生である。将来はデザイナになることを夢みている。派手なドレスのデザインではなく、主婦や子供達の普段着を美しく活動的なものにデザインすることが夢である。

今は女子大に入って二度目の夏休み。一年目は苦労の末に入学したお祝い気分の内にあっという間に終ってしまったが、今年はやっと大学生らしい生活になった。新しく大学のクラブにも入り、専門の勉強ばかりでなく色